

雨の峠越え

小野賢治

本格的にサイクリングを始めて一年半。最初は「かったるい」と
思いつつのぼっていた峠越えも、いつの間にかこ水をめざしてツ
ーリングに出かけるようにはってしまった。峠越えにもいろいろ
あるが、最近最も印象深い時は、秋休みのフリーランの時に越え
た野麦峠である。その日、私は桑鞭高原から高山まで、約94km
を走る予定で朝8:30に出発した。本日の天気はくもりのち雨との
ことであった。スーパー林道を通って、野麦峠の入口である寄合
渡に着いたのは10:40ごろであった。ここで今日の宿泊の手配をし
ようと思って近くの食料品店に公衆電話はどこかと聞いてみたど
ころ、公衆電話はないが、うちの電話を使ってもよいとのことだ
であった。その時ずいぶん田舎に来たんだほと思いつつ、店にある
ハンドルをグルグルまわしてかける電話で宿泊の手配をした。峠
の頂上に着くのは昼になるだろうから、パンでも買っておこうと
思ったがあいにくパンは売ってなかったので、ビスケットを買っ
ておいた。

さて峠に向けて出発である。雨は朝方少しふったが、今のとこ
ろやんでいる。登る高さは約550m。三国峠を越えた者にとっては
それほど恐れる高さではない。ということは何の不安もなく走り
だした。最初のうちは舗装路で、快適に走っていたが、それも少
しでジャリ道になり、登りが急に怖くなる。そしてこのあたり

で、ついに雨がぱらぱら落ちてきた。まあ小降りほらどうってことは無いと思ってみるものの、不安も次第に高まってくる。あの登りの時の何ともいえぬいやな気分の復活である。だいたい疲労もしてきて、休憩も頻繁になる。この状態が続くほらまだいいのだが、そのうちついに雨が本降りになってしまった。着替えはあまり持っていないのですべぬれになると困る。よーしということでもこで用意させたポンチョを登場させた。これで楽になるのではと思って走り出したものの、苦しさはどんどん増すばかりであった。ポンチョで雨は防げるが、中はぬれて、着るものは汗でビショビショになる。直路は悪路で時々後輪がから回りしたり、バランスを失ってたおれそうになる。休憩にも雨やどりをする場所がないし、体を動かさないと冷えてきてカゼをひく。つまり何がなんでも走らねばならない事態に追い込まれてしまったのである。不安も高まる一方で、頂上に着いたとしても雨やどりをする場所があるだろうか。登りは体を動かしているからいいが、下りになったらもるに冷えてしまう。そうしたらカゼをひいてしまってせっかくの旅行もここで終りになってしまおうのだろうか、弊々さまざまな不安が頭をかすめた。途中、直路工事をしているおじさんに、「もう半分位登ったところだ」と聞いて、少し元気がでてきて、とにかくがむしゃらに登り続けた。しかしながら体力の方が限界に近づき始め、激しい疲労のために、体が冷えるのもがまわらず足を休めることがしばしばあった。腹もペコペコになり、頂上

に着いたら食べようと思っていたビスケットも途中で封を切って
しまって、まるで飢えた獣のようにむさぼり食った。そしてさら
に登りつめて行って、頂上に着いたのが午後1時であった。しか
し頂上に着いてもいつもの感激ほどはなく、雨のために視界が数
十メートルしかきがないので、景色どころではなかった。とにか
く、雨やどりの場所がほしかった。見るともう少し登った丘の上
に屋根のついているところがある。とにかくそこへ行ってみよう
と走り始めると、アッ8800 なんとすぐそこに小屋があるではな
いか。しかもちゃんとした休憩小屋が。ああ助かったと思って自
転車を置いて中で休ませもらった。その小屋の名は「お助け小屋」
というのであった。……

そう。つまり全く私のとりこし苦労であったわけで、登る前に
この時についてよく調べておけば、余計な心配ほどしなくて済ん
だのであります。しかし今にして思えば、こういう峠越えも独特
の味があって、いいものだという気がします。

